

ソクラテスから考える現代教育の問題

岩 間 秀 幸
星 汐 美

*プラトンからの引用は、慣例に従い、ステファヌス版のページ数と段落 ABCD により示した。なお、邦訳は、岩波版全集中のものを便宜参照した。

I 序

(1) ソクラテスの問い

ソクラテスは、徳と知の関係性について、次のような問いを残している。

「徳は知である」と「徳とは何か？」である。この二つの問いは、簡単に見えるようで、未だ明確な答えを持っていない。

「徳は知である」というのは、ソクラテスの古い教説のように見えながら、現代だからこそ重大な示唆や警告を我々に与えているものである。

例えば、現在の学校教育に対する批判やその問題点は、少々乱暴な言い方をすれば、集約的に言って、この徳と知のそれぞれのあり方や関わり方に尽きる、と言ってもよい。

つまり、学校における知力、すなわち学力が、人間の善き生き方は言うに及ばず、ただの生き方にさえ関係のないところで問題にされ、要求され、身に着けることを強制されているというそのことが問題なのだ。この場合、その知の中身が問題である。そもそも知育偏重と言われる“知育”自体も、本当の意味で知育と言えるのかどうか。このことについても、一度徹底的に省みなければならないだろう。

知が、人の善き生、善く生きるということ（これを徳と行ってよいだろう）と何の関係もないところで要求され、育てられようとしていることが問題なのである。

何かを学んだり知ったりすること、すなわち“知”が、人が善くなるということ（人間形成と言ってもよい）、すなわち“徳”に、一体どんな影響や関わりがあるのか。これは、古くて新しい教育の問題である。これを最も古い形で、素朴に表現した言葉が、ソクラテスの「徳は知である」なのである。したがって、この教説は問いなのであって、答ではない。この教説自体が、それをどう解釈したらよいのかという問いであり、謎である。ジョン・バーネットも言うように「知徳合一 (the identity of goodness and knowledge) の教説ほど……ソクラテスの名前と密接に結びついているものはない¹⁾」に

¹⁾ *Greek philosophy*, John Burnet, (London, Macmillan, 1914) 138p

もかわらず、この教説をどのような意味で理解すべきかについては、さまざまな議論がなされているが、決着にはいたっていない。

(2) アリストテレスの解釈

この教説に対するアリストテレスの解釈と批判は、以後の解釈の一つのスタンダードな定説になっている。そのため、それを紹介し、吟味してみることにしよう。

近年の著名な西洋古典学者たちも、だいたいこのような解釈に従っている。

・F.M. コンフォード

「わたしがわたし自身でそれ（善あるいは正義であるということ）を見ることができるやいなや、その知識は、他の人々が信じているもののだとしてわたしに教え込まれるたぐいのものには、いっさい取り合わないであろう。」〔括弧内筆者〕²⁾

・W.K.C. ガスリー

「諸君が知恵や正義や善とはなんであるかを知らなければ、賢い行動、正しい行動、善き行動についてうんぬんすることはできないはずである。」³⁾

・ジョン・バーネット

「善さとは何か、そして悪さとは何かを真に (really) 知っている人は誰も、悪を選択することはありえないから、悪は、結局、一種の無知である。」⁴⁾

アリストテレスはまず、ソクラテスの「徳は知である」の教説を次のように解釈する。

「老ソクラテスは、特を認識していることが目的であると考えており、また正義は何であるか、勇敢は何であるか、つまり徳の各部分は何であるかを探し求めていた。彼がそうしたのは至当である。というのは、すべての徳は知識であり、従って正義を知っていることも、正しくあることも同時に両立していける、と彼は考えていたからである。例えば、われわれが幾何や建築の学究を全うすると同時に、われわれは建築士であり、幾何学者であるからである。それゆえに老ソクラテスは、徳が何であるかを探求したが、しかし徳がいかにして生ずるとか、何から生ずるとかを探求していたのではない。⁵⁾」

アリストテレスの言うところを、我々なりに言い換えればこうなる。

例えば、正義の「徳」とは、正義の本質の何たるかを知ることなのであり、したがって、人は正義の何たるかを知れば、同時に、正義の「徳」を身に着けて、正義の人となり、正しい行為をすることができるようになるというわけなのである。

アリストテレスは、ソクラテスの「徳は知である」の教説を以上のように解釈した上で、次のように

2) 『ソクラテス以前以後』大川瑞穂訳（以文社、1977年）62p

3) 『ギリシアの哲学者たち』式部久・澄田宏共訳（理想社、1973年）101p

4) *Greek Philosophy*, John Burnet, (London, Macmillan, 1914) 138p

5) Eudemian Ethics, Aristotele, 『アリストテレス全集 14』茂手木元蔵氏訳（岩波書店、1977年）1-5p

批判している。

「ソクラテスの研究は一面、全く正しかったが、他面、正しくなかった。けだし徳が学知であるというのは本当ではないからである。しかし、特が知なしにはないということ、この点では彼は正しい。ソクラテスは徳を洞察（λόγος）たらしめたが、われわれならば、徳は洞察とともにあると言う。」（*Eth.Nicom.* 6-13⁶⁾）

しかし、アリストテレスのこの批判はあたらない。なぜならば、『エウテュデモス』のソクラテスは、次のように語るからである。

「では、今までのところをひっくり返すといふと、クレイニアス、われわれの問答は、われわれが最初に善いものであると言ったすべてのもの（富、健康、家柄、権力、名誉、思慮深さ、勇敢等）が、遺憾ながら、どうしてもともとそれら自らただ自分らだけで善いものであるかという問題についてなされてきたものではないようだ。むしろ、僕の見るところでは、次のようなものだ。すなわち、もし無知（ἀμαθία）がそれらの道案内をすれば、それらが、その悪くある案内者に随うことができればできるだけ、その反対のものどもよりもそれだけ大きな悪いものである。これに反して、もし思慮（φρόνησις）や知恵（σοφία）が道案内をすれば、それらは、それだけ大きな善いものである。しかしそれらのどちらも、それら自らただ自分らだけでは、何の値打もないものなのだ。」⁷⁾（括弧内筆者）⁸⁾

これを整理すれば、勇氣や正義や節制等は、知が伴えば、真に善きものとなり、幸福をもたらすが、無知を伴えば、逆の結果となる、ということになるであろう。ソクラテスは、アリストテレスの批判に既に答えているのである。なぜならば、『エウテュデモス』で、ソクラテスは、「徳は知である（εἶναι）」を、「徳は知なしにはありえない（οὐ αὐτεῦ）」と同義で使っているからである⁹⁾。

では、アリストテレス自身は「徳」の形成についてどのように考えているのであろうか。アリストテレスは言う。

「まずそうした活動を行うことによって我々はその徳を獲得するに至るのであって、それは、もろもろの技術の場合に似ている。……例えば、ひとは建設することによって大工となり、ことを弾ずることによって琴弾きとなる。それと同じように、われわれはもろもろの正しい行為をなすことによって正しい人となり、もろもろの節制的な行為をなすことにより、節制的なひととなり、もろもろの勇敢な行為をなすことによって勇敢な人となる。」（*Eth.Nicom.*2-1¹⁰⁾）

しかし、「正しい行為をなすことによって」と言っても、何が正しい行為かが知られなければ、やはりこれは空しい議論にならざるを得ないであろう。事実、アリストテレスは、次のようにも言って、ソ

6) 『哲学書 中巻の一』ヘーゲル著、真下信一訳（岩波書店、1961年）86p

7) 『エウテュデモス』281D-E

8) 『メノン』プラトン 87B-89A にも同様の議論がある。

9) 「徳と技術知—ソクラテス的 εἰσότημη について—」森俊洋著（『福岡大学人文論叢』第4巻第2号、1972年9月号）315p

10) 『ニコマコス倫理学（上）』アリストテレス著、高田三郎氏訳（岩波文庫、1971年）

クラテスの立場を肯定するような言い方もしているのである。

「ソクラテスが確立しようと努めた立場は、事実成り立つように思われる。というのは、アクラシアー（自制のないこと、意志薄弱。もっと通俗的な言い方をすれば「わかっちゃいるけど、やめられない」ということ・状態。）という状態が生じるのは、本来の意味で考えられているものがあるときではなくて、それは感覚的な知識があるときのことだからである。」

（括弧内筆者、*Eth.Nicom.7-3*¹¹⁾）

ここで、アリストテレスは「感覚的知識」というような奇妙な言い方をしてお茶を濁しているが、人は「本来の意味で知識と考えられているものがあれば」、言い換えれば「〈徳〉の何たるか」を知れば、それに従って善き行為ができるはずであり、その限りにおいて、「わかっちゃいるけどやめられない」式の「アクラシアー」はありえないと言っているのである。

アリストテレスは最初に否定した、「徳は知である」の自己解釈に逆戻りしている。どうやら、アリストテレスの議論は自家撞着に陥ったようである¹²⁾。何故か。それは最初に、アリストテレスの議論の前提とした「徳は知である」の解釈—徳の何たるかを知れば、徳の人になりうる式の解釈—に何か欠陥があったからだと考えられる。我々は、「徳は知である」の真意は、もっと別のところにあるのではないかと考える。

では、それは何か。何故アリストテレス流の解釈がまずいのか。

それを以下に説明して、小論の意義を述べたいと思う。

(3) 「〈徳〉は知である」の解釈と議論

従来のアリストテレス的解釈に対し、我々は、ソクラテスの「徳は知である」を次のように解釈する。（ソクラテス的と言われる、プラトンの初期対話篇を素直に読めば、当然次のように解釈されるはずである。）

「徳」[「ただ生きるということではなくて、善く生きるということ」(『クリトン』48B) = 「魂を世話し、それを善くすること」(『弁明』29E)] は、「〈徳〉とは何か？」という問いによる知的吟味によってなされる。(より正確には、助けを借りてなされる、と言って良いであろう)

『弁明』でのソクラテスは、「吟味されざる生活は生きるに値しない。」とまで言い切っている。

「人間にとっては、徳その他のことについて、毎日談義するという、このことが、まさに最大の善きことなのであって、我々がそれらについて、問答しながら、自分と他人を吟味しているのを、諸君は聞かれているわけであるが、これに反して、吟味の無い生活は、人間の生きる生活ではない

¹¹⁾ 「徳と知(二) — 『アクラシアー』の問題を中心に —」 加来彰俊著 (『弘前大学人文学部 文経論叢 哲学篇Ⅳ』第4巻第4号, 1968年) 21p

¹²⁾ アリストテレス流の解釈は、全てこのような欠陥を含むものと考えられる。

……」¹³⁾

しかしながら、これではまだ「徳は知である」を正しく解釈したことにはならない。なぜならば、上記のような解釈からは当然、次のような疑問が直ちに生起してくるからである。

それは、ド・フォーゲル女史が言うように「かくしてわれわれの直面する問題は、『いったいどのようにしてソクラテスは、論理的概念に関する単なる知的討論によって、人々を有徳なものにしうるなどと考えることができたのか』ということである¹⁴⁾。」

つまり、我々流の言い方をすれば、なぜ、単なる「〈徳〉とは何か？」という問いによる知的吟味が、「魂の世話をし、それを善くすること」(＝「徳」)になるのか、ということである。

この疑問に正しく答えることによってのみ、我々は、ソクラテス教説「徳は知である」を正しく理解することになるであろう。

我々は、この疑問をどのような仕方で解いたら良いのか、以下にそのことを述べたい。

ところで、「徳は知である」という教説は、文字通りには、プラトンの初期対話篇の中で、「〈徳〉とは何か？」という問いの中で、一つの暗示、又は仮説という形で述べられているに過ぎない¹⁵⁾。（「徳は知である」は、このように、常に「〈徳〉とは何か？」の問いと共に語られ、しかも、それは断定でなく、暗示にとどまっている。）我々は、まず、このように「徳は知である」という命題と「〈徳〉とは何か？」という問いが、常にワンセットで語られているということに留意しなければならない。

ここが、従来のアリストテレス的解釈が見落としていたところである。つまり、「徳は知である」を既に断定された教説とし、それを解釈の出発点としていること、さらに、「〈徳〉とは何か？」という問いとの関係で、この教説を理解しなかったところに、前述したようなアリストテレス流の解釈の矛盾や欠陥が生起するように思われるのである。

我々は、この事実、すなわち、「徳は知である」という命題がいつも、「〈徳〉とは何か？」という問いと共に暗示的にあるということに留意する必要がある。したがって、何故、単なる知的吟味が、「魂を世話し、それを善くすること」になるのかといった疑問に正しく答えるための鍵は、まずこのような問いの解明、ならびに暗示の意味を探ること、にあると言って良いだろう。

では、このような問いの解明のための手がかりとなるものは何か、次にそれを述べよう。

一方、『メノン』は「徳は教えられるか」を主題に展開される対話篇であるが、その冒頭、メノンによって次のような問題が提出される。

メノン「こういう問題に、あなたは答えられますか、ソクラテス。一人間の徳性というものは、はたしてひとに教えることができるものであるか。それとも、それは教えられることはできずに、訓練によって身につけられるものであるか。それともまた、……人間に徳がそなわるのは、生まれつき

¹³⁾ 『弁明』 38A

¹⁴⁾ 『ギリシア哲学と宗教』 コルネリア・J・ド・フォーゲル著、藤沢令夫他訳（筑摩書房、1969年）29p

¹⁵⁾ 例えば、『ラケス』 194D 以下、『カルミデス』 174A、『メノン』 87C-89D、『プロタゴラス』 349B 以下、等。

の素質、ないしはほかの何らかの仕方によるものなのか……。」¹⁶⁾ (傍点筆者)
これを受けて、議論は以下のように展開する。

メノン「まず、「徳が知である」(A)ならば、「徳は教えられる」という仮説・暗示¹⁷⁾の上に、「徳は知である」ことの証明がなされ、確かに「徳は知である」ことが規定される。しかし、世に徳の教師がいないことや、徳を備えた親の子が必ずしも徳を備えた立派な人物とはならないというような経験的事実から、「徳は知である」(B)が、「教えられない」ということが結論として取り出され、「もし徳が誰かにそなわるとすれば、それは明らかに、神の恵みによってそなわるのだということになる。」¹⁸⁾ (傍点筆者)と言われ、続いて次のようなことが言われている。「しかしながら、これについて本当に確かな事柄は、いかにして徳が人間にそなわるようになるかということよりも先に、徳それ自体はそもそも何であるかという問いを手がけてこそ、はじめてわれわれは知ることができる。」¹⁹⁾ (傍点筆者)。そもそも「〈徳〉とは何か」が分かっているから、「徳が教えられるか」否かというようなことを議論することは無意味で、まず「〈徳〉とは何か」(C)から始められなくてはならない、というところで、この対話篇は幕を閉じている。」

「徳は知である」(A・B)ということと、「〈徳〉とは何か？」という問い(C)が、ここでも、ワンセットで語られ、問題とされている。いつもは、「〈徳〉とは何か？」という問いが先にあって、「徳が知である」ことが暗示されるのであるが、ここではそれが逆になっているだけである。構造的には同じ図式と考えてよいだろう。

そして、ここで問題となっているのは、一つは知の性格・内容である。(これは知の多様性と言ってもよい。だから、徳は知であるならば、教えられる、と一旦は規定しておきながら、しかしやはり、徳は確かに知であるが、それは教えられない、というような論理の矛盾が起こってくるのである。前者の知と後者の知は、性格の違うものでなければならぬであろう。)

「学ぶ」「備わる」と「教える」は必ずしも同次元ではない。なぜなら、「学ぶ」「備わる」ことはできても、「教えられない」ことがあることもまた事実であるからである。

さらに、知の多様なあり方と同時に問題となっているのは、それを「教える」とか「教えられない」という問題である。

また、さらに、林竹二氏の言うように「ソクラテスは教育はすべて何らかの無知からの離脱だと考えていた²⁰⁾」(傍点筆者)とすれば、知の多様性に相応した無知の多様性も問題となってくるはずである。

したがって、このような知の多様性→無知の多様性→教えるの多様性を明らかにし、整理することが、「〈徳〉とは何か？」の問いを理解するヒント、前提条件となると考えるのである。そして、問いを解明

16) 『メノン』プラトン70A

17) 『メノン』プラトン87BC.

18) 『メノン』プラトン100B

19) 『メノン』プラトン100B

20) 「徳は教えるか—ソクラテス・プラトンの場合—」林竹二著〔『道徳教育講座第一巻、道徳教育とは何か』古川哲史他編集(角川書店、1958年)所収〕78p

することは、冒頭の一番大きな疑問、何故、単なる知的吟味が、徳足りうるのかに答えることにもなるだろう。

そして、このようなことを探求する過程で、『メノン』において出された「〈徳〉はどのような仕方で備わるか」ということや、「神の恵みによってそなわる」というこの真意も、自ずと明らかになってくると考えられる。

「徳は知である」のアリストテレス流の解釈は、このような手続きをふまず、あまりにも単純に、つまり、言葉の上だけで、問題を処理しすぎているように思われる。

Ⅱでは、「〈徳〉とは何か？」の問いを理解するために、知の多様性を中心に整理する。

Ⅱ 問いの理解のための前提としての知の多様性

本章では、プラトン初期対話篇で語られているところの知の多様性について整理したい。又、そこから派生してくるところの無知の多様性、「教える」（教育）の多様性をも整理し、「〈徳〉とは何か？」という問いの理解のための前提としたい。

1 知の多様性

プラトン初期対話篇に述べられている知の性格・内容の多様性は、次の三種に区別して理解するのが便利のように思われる。まず、三種の知を示し、それぞれについて若干の解説を述べてみよう。

- (1) ソフィスト的知
- (2) 技術知（専門的知、個人的知、手仕事の知と言っても良い）
- (3) ソクラテス的知（ソクラテスが問題にし、求めた知という意味で使う）

(1) ソフィスト的知

ソフィストたちが、当時のアテナイの青年たちに授けたものは、処世術としての弁論術のための、百科全書的知識であった。（『ゴルギアス』457AB）

G. Ryle の有名な「知」の分類*によれば、この知は、knowing-that〔事実知、対象知〕（事実についての対象的な知識）ということになる。

* G. Ryle は、"The Concept of Mind" ch.2 で、「知」を knowing-that（事実知）と knowing-how（技能知）に区別している。

これは、現代でいえば、学校で教えてくれるような知の在り方、教養知としての知の在り方、もっと分かりやすいいえば、今日、我々が、所謂「知識」と呼んでいる物の知識の在り方に他ならない。

(2) 技術知

これは、専門的な知、職人的な知、手仕事の知と言ってもよいのだが、プラトンの初期対話篇の随所に置いて取り上げられ、問題にされている。(技術知は、いつもたいていの場合、ソクラテスの知を説明する時の craft analogy (術の類比) として語られる場合が多いのであるが、このことについては次章で言及する。)

これは、現代で言えばやはり、職人的な知、あるいは、華道や茶道などの稽古場や習い事など、知れば、できるといったような知の在り方である。それは、限られた専門領域内でのみ通用する知である。ギリシア語の知を意味する《ἐπιστήμη^{エピステーメ}》が、知識にして同時に能力であったことは、よく知られているところである。また『カルシデス』篇(165C-166B)では、技術知とは、例えば建築術という技術知が家作りを対象とし、又家作りをその成果とする、というように、何等かの対象と成果(ἔργον)をもっているという仕方で語られている。だからまた、技術知とは、対象に関わり、対象を善くする知ということもできるのである。

これを Ryle 式の知の分類に当てはめれば、knowing-how ということになるだろう。しかし、knowing-how は、少なくとも knowing-that を前提として、あるいは、それを含み込む形で成立するはずである。その意味では、knowing-that と knowing-how は、それほど、Ryle が言うほどには、截然とは切り離せるものではないように思えるのである。

(3) ソクラテスの知

これは、ソクラテスが問題にし、追求した知という意味で使うことにする。この知は、道徳の知、つまり、自己が善く生きるための知といってよいだろう。その意味で、この知は、自己に関わり、自己を善くする知と言ってもよいであろう。『弁明』では、この知は人生の「最大の事柄」(22D.τὰ μέγιστα) (もともと重要で大切な事柄) に関する知であり、「善美の事柄」(21D.καλον κάγαθον) に関する知、つまり善(悪)の知であると言われている。

この知は、何かを知れば、できるといったような知の構造・在り方において、技術知と似る。(だから、次章で述べるように、ソクラテスの知を説明するのに、技術知との類比が用いられるのである。)

しかし、技術知が、むしろ、knowing-how の方に力点(比重)があるのに比べて、道徳に関する知の方は、knowing-that の方に比重があるようにも思われる。なぜなら、道徳の問題については、knowing-how (何が良くて何が悪いかを知ること) がわからなければ、人は、いかようにも行動しようがないと考えられるからである。技術知は、例えば車の運転やスポーツ技術のように、時が経ち熟練してくれば、knowing-that の方は次第に後退して、あまり問題となくなってくる。これに対して、道徳に関する知の場合には、技術知のような手慣れや熟練(身体で習得するような)がないのである。現実に生起する一つ一つのケースについて、いつでも人は、いちいち知的作業をしなければならないのである。その理由は、技術知は現実世界での問題であるが、道徳の知、すなわち、善悪に関することは、何かそれを超え出たところで問題にされなくてはならないからではないかと考えられる。

さらに、J. バーネットも言うように、「技術や能力（δύναμις）はいつも『正反対のものを伴う』（‘of opposites’）のである。それを善用し得る人は、また悪用し得る人でもある。それゆえ、徳にはこれ以上のものが含まれなければならない²¹⁾。」（傍点筆者）のである。

2 無知の多様性

第1節で述べた知の多様性に対応して、その無知の在り方も多様性を帯びてくる。第2節ではそれを整理してみよう。

（1）ソフィスト的無知

これは、対象に関する知（いわゆる今日、我々が知識と呼んでいるもの）が欠如している状態を言うのであって、単に何かを知らない、という意味で至極単純な無知である。だから、このような無知は、人間にとって、特に重大な問題（人間に誤った行為を選択させ不幸を招くような）とはならない、とソクラテスは考えていた。

（2）技術的無知

これは、知らないから、できないというような無知であって、やはりそのような意味で、単なる無知と考えてよからう。技術知は、少数の専門家が持てばよい知であって、万人がもつ必要はない。例えば、医術は少数の専門家が持てばよいのである。医術は患者という対象に関わり、それを善くする知であるから、何人かの専門家がいれば十分であって、他の多くの人の便宜を図ることができるのである。皆が医者になる必要はないのである。だから、このような無知は、人間が善く生きる上でさして問題にならない。

（3）ソクラテス的無知

ソクラテス的知は、自己に関わり自己を善くするような知であるから、万人が備えていなければならない、とソクラテスは考えていた。だから、ソクラテス的無知（ソクラテス的知を欠くという意味である）は、人間に行為の選択を誤らせ、人間を不幸に導く可能性が大であるから、そのような無知は、人間が善く生きる上で重大な問題となる。

しかし、ソクラテスのいう無知は、次に述べるような意味で、大変やっかいな、一筋縄ではいかない無知なのである。

技術知は、専門知であるから、専門家だけが持つ知である。だから、専門家と素人の区別がはっきりしている。そのような知に関しては、知があるか無い（無知）かの二通りの在り方しかなく、そのことは誰にも明らかである。その意味で、中途半端な知の在り方は無いのである。例えば、我々は医術につ

²¹⁾ John Burnet, *op. cit.*, 142p

いて、全くの知者（玄人）か、全くの無知者（素人）であるか、である。

これに対して、ソクラテスが問題とする道德の知に関しては、万人が持つべき知であり、ある意味では、万人が既に持っている知なのである。我々は、道德の知に関しては、全くの知か全くの無知かという二通りの在り方ではなく、その間に無限に存在する知と無知との間のどこかに位置しているのである。つまり、道德の知に関しては、我々は全くの知者でもないし、全くの無知者でもない。ソクラテスの言う無知は、道德に関し、このような中間者としての無知であった。

ソクラテス的知については、万人が持つべきであるが、専門家がおらず、また、そのような知に関して、人間は知と無知の間のどこにいるという意味で、中間者である。だから人は、自分がいつもある意味では道德について中間的な知を持っているから、それについてはもう十分知っていると思ひこみ、「考え違い」（πλημμέλεια）（『弁明』22D）をするのである。ソクラテスの言う「無知」は、そういう意味で大変厄介な無知であった。このような思い違いは、人を本当に良いものから遠ざけ、世間でそれらしく見えるもの（ドサクサという。）に捕われさせ、厚く心理を覆い、人の行為を支配するのである。

3 「教える」の多様性

知や無知の多様性に伴って、教えることの意味内容も当然、多様性を持ってくる。第3節では、それについて述べよう。

(1) ソフィスト的知における「教える」ということ

ソフィスト的知というのは、前述したように、現在我々が、所謂「知識」と称しているものに他ならなかった。このような知を教えるということは、今日、学校の中で授業という形をとって、日常行われていることである。しかし、これは単なる教授であって、教育の名には値しない。なぜなら、一般に言われるように、「教育」が“人が善くなるための手助け”だとするならば、ソフィスト的な教授は、その個人が善くなるか否かについては、何の保証も責任も持つものではないからである。

このように、ソフィスト的知は、教授という形に置いて、完全に相手に教えられ、伝える事ができる。このような知の伝わり方を、直接伝知と呼んでおこう。

(2) 技術知における「教える」ということ

技術知が、knowing-that をそのうちに含みこむ形で成立するような knowing-how であるということが、既に説明された。このことを、『ゴルギアス』（450D）では、技術知は、「言論」と「実際の行動（行為）」によって習得されるというような形で述べている。つまり、技術知は、言葉による説明（これを教えるの内容と言ってよいだろう。）と実際の行動によって習得されるということを言っているのである。

もっと簡単に言えば、技術知は、教えられる（言葉で説明できる）部分、つまり、教授という形で直接伝知できる部分に、自己訓練を付加することに寄って習得できると言ってよいだろう。つまり、技術

知には教えられる部分（言葉によって伝達可能な知識）と教えられない部分（必ずしも言葉によって伝達しえない知識）とがあるのである。しかし、後者についても、教師と生徒が経験を共有できるという意味で、それはやはり教えられるとみてよいであろう。それは、お茶やお花といった、習い事や稽古ごとの類を想像すれば、十分であろう。

まとめれば、技術知における「教える」ということは、言葉による直接伝知＋自己訓練ということになるだろうが、基本的には、教師〔教える側〕と生徒〔教えられる側（学ぶ側）〕が、経験を共有することができるという意味において、技術知は、教えることができると言ってよいだろう。

（3）ソクラテスの知における「教える」ということ

前述したように、ソクラテスの知、つまり道德の知には、何かを知ったり（知識）、何かができたり（能力）する以上の事が含まれねばならなかった。それは何かと言えば、善悪に関する事柄である。このような善悪の問題は、しかし、日常的・世間的領域では、ついにその根本的な解決を見ないのである。日常的・世間的な経験をいくら積み重ねても、せいぜいそれは処世知にとどまるのであって、根本的な解決にはならない。我々が善悪の問題に取り組むためには、このような日常的・世間的世界を超えて、「普遍」（真理と言っても良い。）に関わらなければならない。しかし、普遍知や真理は、直接に言葉で教えること（直接伝知）はできない。このような知を「教える」には、このような知を間接的に伝える〔学ばせる〕何等かの別な方法（これを間接伝知と言っておこう）が工夫されなければならなかった。

そして、ソクラテスは、知を直接伝える代わりに、このような知の欠如を人に気付かせる方法をとった。つまり、無知からの解放を持って「教育」の仕事としたのである。

そのような間接伝知の方法が、「〈徳〉とは何か」という問いによって知的吟味をすることであった。

Ⅲでは、「〈徳〉とは何か」という問いから昨今の学校教育の問題を考え、本論をまとめたいと思う。

Ⅲ まとめ

ソクラテスの知は、上述したように、無知からの解放を持って、知を教えることとした（教育とした）。そのためには、自らの知の欠如を自らに悟らせなければならない。だが、自らで知の欠如を認識することは難しい。

では、知の欠如を気付かせるためには、どうしたらいいのか。その答えが行きつく先が、「〈徳〉とは何か」である。

例えば、幼子が他人の物を壊したとする。その幼子に対して、壊したことを怒り、壊した理由を尋ね、そして、何故他人の物を壊してはいけないのかを諭すだろう。

先に述べているように、〈徳〉は「ただ生きることではなく、善く生きること」である。例のように、「何故か」を尋ね、自らに考えさせること、これが知的吟味をさせることであり、それによって善く生きることを知ることが、〈徳〉を知ることではないかと考える。

何故か、という問いは大なり小なり、誰しもが幾度となく問われてきた問いだろう。そのそれぞれの問いの答えが〈徳〉であり、それを考えることが、善く生きようとする事なのである。

そして、その手助けをするのが教育であり、今日の学校教育における問題なのではないだろうか。

はじめに述べたように、近年の学校教育の問題は、徳と知のあり方や関わり方に尽きる。学校における知、というのは学力であり、ソフィスト的な知である。それは教育として教えられる物であり、徳とは異なるものである。また、本来ならば徳を身につけさせる道徳という教科においても、知の押しつけがなされ、知的吟味がなされていない。

現実の学校問題に照らし合わせてみるならば、例えばいじめが起こった時、全校集会を開き、「いじめはいけないことだ」ということを全員に向けて発信する。だが、これではただの知の押しつけであり、そこに知的吟味がなく、自らの知の欠如を認識するきっかけとしては印象に薄い。本当に徳を身につけてほしいのならば、何故いじめはいけないのか、自分がされたらどう思うのか、などを問い、知的吟味をさせ、自らで悟らせる必要があるだろう。ただ知を押しつけるだけでは、根本的に解決しないのである。

このような知の押しつけや、知的吟味の欠如を考え直させるものが「〈徳〉とは何か？」であり、「徳は知である」なのである。徳を善く生きること、知を善悪にかかわることとするならば、「徳は知である」というのは、善悪を見極め善く生きること（善悪を正しく判断すること）となるだろう。これは先にも述べたように、教師が強制できるものではなく、相手に気付かせることで教えることができるものである。つまり、生徒が自ら考えられるように、教師が手助けするものである。

また、この話は学校教育のみのことではない。善く生きること、というのは生涯をかけて考えねばならない問題であり、その都度考える必要がある問いなのだ。考え得る問題が起きた時に、誰しもが考えることができ、また、誰しもが教師もしくは生徒になり得るものなのだ。年上から一方的に教授するものではなく、年齢や性別、出身などに関わらず、対等に言葉を交わすことによってお互いに考え、学ぶことができるものである。これを相互学習とっておく。

徳というのは、簡単に言えば善く生きることである。その善く生きることというのは、様々な知識を学び、知ることによって、その様々な情報から善悪を判断するものではないかと考えられる。知識を得ることによって徳が生まれ、その徳によって、また知が形成されるのではないだろうか。

ただ、知を得ることも、徳を得ることも一人ではできない。自分ひとりだけの物差しでは、自分の考えのみが善となり、それが本当に正しいかどうかを確かめる術がないためである。それではただの独りよがりになってしまう。そうならないように手助けする人間が多いほど、たくさんの考え方に触れ、知ることができ、より善い判断をできるようになるのではないだろうか。知のないところに徳はできず、徳のない知は悪と言っても良いだろう。

徳と知は分けて考えられる物ではない。しかし、それを同一と見てしまうのもそれは間違っている。我々が知育をするならば、我々がすべきことは、善悪を教えることではなく、自ら考えさせるような良い問いを投げかけることではないだろうか。

それは、誰かが一方的に行うものではなく、問いかけた方も問いかけられた方も、お互いが学ぶ相互学習である。それこそが現代の教育に求められているものであり、我々が真に持たなければならない〈徳〉なのではないだろうか。

（文責に関しては、Ⅰ及びⅡは岩間が、Ⅲは星が執筆し、全体の文章の統一は両者で行った。）

参考文献

- Greek philosophy, John Burnet, (London, Macmillan, 1914)
『ソクラテス以前以後』大川瑞穂訳（以文社、1977年）
『ギリシアの哲学者たち』式部久・澄田宏共訳（理想社、1973年）
『アリストテレス全集14』茂手木元蔵氏訳（岩波書店、1977年）
『哲学書 中巻の一』ヘーゲル著、真下信一訳（岩波書店、1961年）
「徳と技術知—ソクラテスの ἐπιστήμη について—」森俊洋著（『福岡大学人文論叢』第4巻第2号、1972年9月号）
『ニコマコス倫理学（上）』アリストテレス著、高田三郎氏訳（岩波文庫、1971年）
「徳と知（二）—『アクラシア』の問題を中心に—」加来彰俊著（『弘前大学人文学部 文経論叢 哲学篇Ⅳ』第4巻第4号、1968年）
『ギリシア哲学と宗教』コルネリア・J・ド・フォーゲル著、藤沢令夫他訳（筑摩書房、1969年）
「徳は教えるか—ソクラテス・プラトンの場合—」林竹二著（『道徳教育講座第一巻、道徳教育とは何か』古川哲史他編集（角川書店、1958年）所収）
『メノン』プラトン
『エウテュデモス』
『弁明』
『ラケス』
『カルミデス』
『プロタゴラス』
『ゴルギアス』
『ソクラテス研究—ソクラテスの提出した知の整理による「徳は知である」と自己知の新解釈—』岩間秀幸著、(コスモヒルズ、2002年)
(その他の参考文献については、本書 331p-335p の文献表を参照のこと)